物語から見た心理療法システム

――心理療法基礎論の為のスケッチ的論考――

廣瀬幸市

はじめに

本研究のタイトルに示している心理療法基礎論は、臨床心理学において現時点では、確立した学問領域としては存在しない。日本の心理学史において、臨床心理学は敗戦後、アメリカ主導による教育心理学の四本柱のうちの一つ、「人格(適応)」の領域が設定されることにより、アメリカの臨床心理学の強い影響の下で現在の学問体系に整備されてきた(佐藤 2002)。日本臨床心理学会が発足したのが一九六四年で、その後、日本心理臨床学会が一九八二年に分離独立し、その会員を中心に日本臨床心理士資格認定協会が一九八八年に設立された。この史実からも、日本の臨床心理学は現在見るような学問としては半世紀を越えていない。むしろ、輪郭としては確立している観を呈しているが、内部では一通りの形式を揃えたことによって次の段階への進化・整備を現在も進行中である、と考える方が実情に近いと筆者は考えている。

現在までの学問体系において、心理療法の基礎に該当するものとしては、心理療法原論が考えられる。これは、心理療法を解説する書物において、各種の心理療法の技法を紹介するに当たって、技法や学派特有のアプローチではない、

心理療法に共通する内容のものとして、その冒頭の章などで論じられてきたものである。現在でもそのような記述の書物も散見するが、主として、クライエントが心理療法（カウンセリング）において体験するプロセスを提示することで、学派固有のアプローチによらない心理療法そのものの成果とそこで生じる出来事が祖述されてきた。ごく最近の例で言えば、倉光（2007）は、「カウンセリングの一般的プロセス」として(1)自分の問題を意識してカウンセリングを受けるクライエント、(2)家族や友人など周囲の人の問題でカウンセラーのもとを訪れるクライエント、そして、(3)周囲の人に連れて来られてカウンセラーに出会うクライエント、という三つのルートに分けて記述した上で、カウンセリング・プロセスとして「相談の申込み／インテーク面接／アセスメント面接／フィードバック面接／心理面接／終結と中断」として纏めている。しかも、このカウンセリング・プロセスに更に桑原（2007）がコメントを寄せているという入念さである。心理療法原論はこのように、個別のケースを土台としながらも守秘義務に抵触しないように外的事実を多少加工して、心的現実には変更がないように工夫して提示した上で、極めて個別的である出来事をなるだけ一般的な記述を試みて、解説者の視点からコメントを加えたものとなってきた（倉光 2007）、と言える。心理療法を学ぶ過程で、筆者自身がこのような心理療法原論から自らの心理臨床実践に役立つ何かを学び取ってきた。それ故、この心理療法原論を批判するつもりがあるのではない。そうではなくて、先述したように、日本の臨床心理学は一応の形式を整えたのだから、今後は更に議論を深めていく段階に入ったのだと主張したいのである。

本論で提唱している心理療法基礎論は、心理臨床実践に即して実践により深められてくる領域の内容を扱っているので、大学院生を始めとする心理臨床実践を学び始めた初学者に専門教育と訓練の為に割り当てられる臨床心理学というよりは、むしろ心理臨床学と言った方が良い領域に属するのかもしれない。しかし、学問領域のカテゴリ分類は後世の人々に任せることにして、これまでのような技法や学派に固有のアプローチや体験プロセスの研究ではない、心理療法について考えていく視点が必要である。学派の違いを捨象したところで心理療法では一体何が起こっているのか？　と

いう根本的な問いが問われなければならない。それは、技法として自らの実践に取り入れたり参考にできたりしないかという実際的なレベルの問いではない。うまく進んだ（勿論、うまく進まなかったでもよい）心理療法はどのように展開していたのか、という回答困難な疑問に対して、それが解ったからといって技法に直ぐに反映させることができるとは言い難いような位相のレベルで考えることである。このような問いは、技法を学んで身につけ自分のスタイルを形成している初期段階の臨床家にとっては、あまり意味を持たないだろう。或る程度、自分のスタイルを形成した人が、十分に機能している自らの実践活動の中で何らかの拍子にふと、何気なく機能している自らの在り方に疑問を持った時に抱くような問いである。このような問いはさりげないが故に、それに答えようとするのはなかなか難しい。このように心理療法を本当の意味で基礎から考えていくことが、筆者が提唱しようとしている心理療法基礎論の目指しているところなのである。

さて、心理療法基礎論が如何なるものかが分かったので、それを心理臨床実践活動で遭遇するテーマで考えていきたい。但し、これまでで理解される通り、筆者の担当したケースを加工したものを俎上に載せて議論するのではない。担当ケースを背後に抱えながら、現実性を保ったままで極力具体性を伏せて扱おうと考えている。そのようなテーマとして、本論では「物語」を取り上げることにする。

一　物語と心理療法

心理臨床における物語の意義については、これまで先行研究者によって十分明らかにされてきたと思われる。ナラティヴ・アプローチを始めとして、家族療法、精神分析、遊戯療法、描画療法に至るまで、立場の違いにより多少力点の置かれ方に違いはあるが、物語が心理臨床における重要な概念であることに意見は一致しているようである。また、この動きは心理臨床に限らず医療の領域においても、ナラティブ・ベイスト・メディスンとして、従来のエビデンス・ベ

イスト・メディスンを相補するアプローチとして地歩を固めつつあるようである。

本論で取り組むのは、ある一つの学派やアプローチと物語との関わり、あるいはそのアプローチから見えてくる物語の特質といったことではない。アプローチが異なれば、当然ながら物語との関わりの局面が異なる。心理臨床実践者向けの雑誌に「ナラティヴと心理療法」という連載が展開されたが、[1] 一三回連続のその臨床ゼミはオムニバス形式を取り、各領域で活躍中の臨床家十二名がそれぞれ自分の持ち場から見た「ナラティヴと心理療法」を論考していた。そこで認められた特質は、全く重複がないということにはならないが、それぞれ執筆者によって強調点が少しずつずれているように感じられた。このずれは、心理臨床という実践から生まれてくるものであるだけに、具体性に裏打ちされてリアルであり、生半可な統括を許さない重みを持っている。しかし、物語と心理療法の関係の局面を増やす度に強調されて浮かび上がってくる特質が違っているのでは、なかなか物語と心理療法の関係が見えてこない。そこで本論では、心理療法に共通する地平という位相を仮定して、そこから物語との関係について考えてみたいと思う。

ところで、百花繚乱の様を見せる学派やアプローチに基づく心理療法に対して、それらに共通する地平を仮定することが一体できるのだろうか？　それは単なる思考実験ではないのか？　たとえ想定できたとしても心理臨床の実践に役に立つのだろうか？　このような反論や疑問がすぐに上がってきそうである。そのような事態をわきまえつつ、論考を進めてみたい。上のような疑問・反論は心理療法原論のディスクールが行き渡っていた時代から既にあっただろうし、また、心理療法を学ぶ人々の内部から発せられることで、自分が専門とするアプローチ以外の他の人々との間で、カンファレンス以外の場で心理療法の治療機序について話し合ったりしない慣例・土壌を醸成しているのではなかろうか。そのような風潮に抗して、本論では敢えて心理療法に共通する地平が存在すると仮定し、その位相を想定して「物語と心理療法」の議論を行う。しかし、その議論を始める前に、心理療法に共通する地平という位相を確認しておく必要がある。

二　場所論的心理療法モデル

この位相に心理療法の働きを描いたものが、筆者が提唱してきた「場所論的心理療法モデル」である（廣瀬 2003, 2005a, 2005b）。本モデルは、清水博の提唱する場の理論に関する一連の著作と西田哲学に関する著書を手がかりに、翻案・改良・修正を重ねた手作りに近い構成モデルである。二〇〇六年度大谷大学真宗総合研究所の「一般研究」（以下、「一般研究」と略す）を通して、本モデルは心理療法以外の領域においても人間関係を描写するために創案された諸モデルと共有し得る内容であることが判明した。本モデルの記述は、「一般研究」の成果の一部として発刊した『複雑系から見た心理療法理解――心理療法基礎論に向けて――』（以下、成果報告書と呼ぶ）の第四章に詳しい。この成果報告書を閲覧できない人がいることを想定して、場所論的心理療法モデルを概観しておく。

このモデルは、クライエントとセラピストを含んだ心理療法の営みを一つのシステムと見なす。システムとは、複雑系科学が対象としている「生きている」システムのことであり、井庭・福原（1998）が言うように「バラバラに分解できる要素の単純な組み合わせで全体が構成されているようなシステムではなく、バラバラにしてみると本質が抜け落ちてしまうような特殊なシステム」のことである。複雑系科学は、「生成」に焦点をおいて、生命・知能・社会などを理解しようとしている。だから、「生きている」システムは、これまで主として工学の領域で扱われてきたような、制御を指向するシステムとは質的に全く異なると言ってよい。ところが、これまでの無生物的なノン・ヒューマンなイメージが強すぎて、人と人の関係をシステムと捉えることに抵抗感を覚える人もいると思われる。しかし、後に判るように、心理療法をシステムと捉えることで今まで取れなかった視点に立つことができるようになるのである。そこで今一度、本論で言うところのシステムを確認しておく。すなわち、或るシステムがあって、そのシステムを構成する要素は各自のルールに従って機能しており、局所的な相互作用によって全体の状態・振舞いが決定される。そしてそれらの全体的な振

舞いを基に個々の構成要素のルール・機能・関係性が変化していく。このようなシステムが「生きている」システムであり、本論で想定している「複雑系」の定義である（廣瀬 2007）。この複雑系をより詳しく見ていくためのシステム論については成果報告書の第二章に詳しい。

さて、クライエントもセラピストもある意味、それ自体システムと考えられるのであるが、それらを含み込んで心理療法という営みが生成されてくる動きを心理療法システムと捉えるのである。クライエントやセラピストは目に見えるので実体として捉え易いが、心理療法システムは目に見えないので、実体を見通す目がないと把握するのが難しいかもしれない。この困難が根強いことは最初から予想されていて、そのために成果報告書第四章第一節で「意識・存在フィールド」を詳説したのであった。そこでは、井筒哲学の導きを借りながら意識と存在の深層に下りていき、西欧的主客構造が解体され尽くした果てに忽然と脱我的主体性として甦ってくる地点まで行き着いた。その主体性は、通常の経験的現実の世界で機能する時に特殊なフィールドとしての内的構造を持つ。全く内部分節のない存在が本源的無分節性の自由を保ちながら、しかも存在分節し、存在分節しながら、しかもその分節態に縛られない、そのような形で働かせていく心のあり方の全体である。それはまた、「主体」「客体」を二つの磁極とし、両者の間に流れる意識・存在的緊張のエネルギーの律動のうちに自ずから形成される不可視のフィールドでもある（井筒 1989）。この理解は、大乗仏教における主として唯識哲学に則ったものであるから、場所論的心理療法モデルの基になった西田哲学を通しても共通の地下水脈に連なっている。このような主客二分論が解体する地平にまで下りてくると、クライエントとセラピストの姿は消失して、クライエントとセラピストが語り合っているという場が明瞭に見えてくる。その場所は、成果報告書第三章第三節に詳しいが、「生活の場」「人生の場」「生死の場」（清水 2003）というように、視点により次元を異にしながらも、根底の所では「絶対無の場所」に抱えられている。

このように、絶対無の場所を根底に諸々の次元の場が、クライエントとセラピストの語り合う場において接している。

このような実体でない状況を想定できると、クライエントとセラピストが語り合うナラティヴは、そのような状況の場から生まれ響いて来るものであるとイメージすることができるようになる。その時、クライエントとセラピストが語り合う場を含んで、双方のナラティヴを産出している、目に見えない主体というものが浮かび上がってくる。そこから、それを心理療法システムとして考えることができるようになるにはそれほど大きな飛躍はないだろう。

このようにして想定することができた心理療法システムは、クライエントとセラピスト双方のナラティヴの結果、物語を生み出し続けることになる。クライエントあるいはセラピストいずれかのナラティヴが次のナラティヴを生み出す。次のナラティヴは語られてもいいし、沈黙であってもよい。そのナラティヴを発するのが同じ人であってもよい。これが繰り返されることによって、ナラティヴが次のナラティヴを生み、それらは筋となって物語を形成していく。このように、ナラティヴが次のナラティヴを生むという作動が継起していくことが、心理療法システムが成立する第一義の要件であることを、筆者は「一般研究」を通してオートポイエーシス・システムの原理から理解した。この辺りは成果報告書第二章第二節および第五章で詳説している。関心を持たれた方は同書に当たっていただきたい。一言すれば、オートポイエーシス・システムは、自己自身の要素を自己自身で産出し、そこからまた自己自身を産出する系である。自ら作動する領域を自身で産出し、境界を自己自身で定義し、自己自身を再産出していく(河本 2006)。「自己の作用が自己自身へと回帰してくる再帰的循環過程」(小林 2007) のうち、自己言及的側面に特に注目したものと考えられる。

三　自己というシステム

筆者は「一般研究」を通して、心理療法システムが複雑系という「生きている」システムであると理解した。そこで以下において、物語と心理療法を論じる上で必要最低限必要な複雑系の概念を押さえておきたい。そのために小林(2007)の導きを援用することにする。彼は、21世紀の科学と対話できる哲学の為に『複雑系の哲学』を整備したが、まず最初

に「実体の存在論」を解体して「関係の存在論」へ導いた。その後、更に関係の存在論を「生成の存在論」へと展開させた。その上で、複雑系科学に見られる現象や論理を哲学的に基礎付けた。このように、「生成の哲学」に貫かれた生成の存在論から見ると、複雑系は次のようになる。即ち、複雑系において、各事象は独立して生起することはできず、相互連関の網の目の中から、その都度出現してくる出来事としてのみ生起してくる。しかも、一つの事象の生起は、一つの事象の中に他の事象が浸透することによって生起してくる。事象と事象は、相互に他を含み、相即相入しながら、自己を形成していく。このような世界においては、部分は全体を映し、一は多を映し、個は場を映しているのだが、それに止まらず、全体を映す部分、多を映す一、場を映す個としての事象同士が相互に作用し合うことによって、各事象が変化していくと共に、全体も変化していく。その全体の変化に応じて、各事象も変化していく。このような相互連関と相互作用の有様は、華厳哲学の事事無礙法界の様を呈しているが、複雑系で特に注目しておきたいのが、全体と部分との間に秩序形成のフィードバック・ループができることである。つまり、部分と部分の相互作用から全体が形成されると共に、その全体がまた部分同士に反映して、全体と部分の相互浸透が繰り返されることによって秩序形成がなされるということである。このような「相互作用からの自己形成」を小林（2007）は特に「相成」と呼んで、生成する世界の本質だと指摘する。この秩序形成においては、「自己の作用が自己自身へと回帰してくる再帰的循環過程」が見られる。このような自己言及的な循環機構と再帰的な反応過程は、自己組織化現象において、宇宙・物質・生命・社会・経済・文化などの領域に遍く見られる（Kauffman, 1995）。

生成から見たシステムの自己を考える為に、いま自己組織化する系を取り上げてみる。この系は、環境に開かれた非平衡状態の開放系[2]であり、例えば生物の代謝に見られるように、環境との間でエネルギー・物質・情報を交換して、絶えず環境と相互作用していなければならない。このとき、自己組織系は、環境に適応して柔軟に自己自身を作り変え、自己自身を変革していくと同時に、そのことを通して積極的に環境を形成し創造してもいく。自己組織系は、境界を通

して自己の中に環境を受容すると共に、境界を設定することで環境の中に自己自身を創造していく（河本 2000）。このような環境と系との相互作用の中から、新しい秩序が形成されてくる。非平衡状態の開放系において、全体の規則性から逸脱する不安定な「ゆらぎ」が増幅してきて、ある臨界点を越えると、高次の秩序への飛躍が起きて、新しい組織が自発的に形成される。[3] この自発的秩序形成は「創発（emergence）」という概念で捉えられる。創発とは、下位レベルの諸要素間の相互作用から、それら諸要素の総和以上の新しい構造や形態がより上位の秩序として出現することである（井庭・福原 1998）。化学反応、気象の変動、地球内部や大気圏に生じる対流、生命の進化、経済の変動、脳の進化や知能の発達など、すべて創発現象を伴う自己組織化過程として捉えることができる（都甲・江崎・林 1999）。自己組織化理論とカオス理論を総合する複雑系の科学は、小林（2007）によれば、自己組織化理論が「混沌からの秩序」に着目し、カオス理論が「秩序からの混沌」に着目するが、いずれも生成する世界のそれぞれの断面を捉えたものである、ということになる。そして、複雑系の科学を創発の科学であると指摘している。

このような複雑系の概念からすると、システムの自己とはどのようなものであるのだろうか。小林（2007）によれば、「自己は、自己自身に関係すると共に、それによって他者と関係し、他者と関係することによって、自己と関係する」。いま自己と他者を、自己と環境と言い換えれば、自己組織系で見たことと同じになる。即ち、自己が環境に働きかけることによって、逆に環境から働きかけられるという循環が成り立っており、自己と環境の相互作用が繰り返し自己自身の生成過程に組み込まれていく。このような無限級数的な循環を、自己は自己自身で、自己自身の境界を決定することによって作ることができる。自己が環境との間に作る境界は、自己と環境を区別すると同時に、自己と環境を相互に浸透させており、「自己と環境との同一性と差異性との矛盾を統合している」。細胞膜を通して物質・エネルギー・情報の代謝を行う細胞に見られるように、境界は「自己と環境を分離するとともに、結合する」。このように自己は、自己と他者とを区別することによって自己同一性を保つのだが、この自己同一性は、他者との同一性なくしては成り立たない。

即ち、「自己は、同一性と差異性との同一性によって成り立つ」のである。以上見てきたような自己言及的な再帰的循環過程によって、自己自身の作動が巡り巡って自身に還ってきた時、以前の自己より一歩前進している。新たな自己が生み出されている。[4] つまり、「自己は、絶えず自己自身を更新し、自己超出していく運動である」。

このように小林が記述したような、自己を運動として把握する視点は、筆者も成果報告書の第三章第三節において清水の即興劇モデルを紹介する中で、生成の論理と明言こそしなかったものの、その本質を把捉して指摘しておいた。即ち、自己とは論理の全く異なる二つの自己（あるいは主体性）との間の弁証法的運動である、と捉えたのであった。それら二つの自己との間の弁証法的運動は、木村が一九七〇年代以降に展開した「あいだ」という術語が指示する事態であるし、ハイデガーの存在論的差異を踏まえた上で一九九〇年代以降論じられている「生命論的差異」と言い換えてもよい。[5] 自己をこのように運動と捉える視点をもてると、心の病は自己という運動の何らかの不調あるいは閉塞的状態と見なすことができるようになる。清水（2003）は即興劇モデルを応用して、社会における状況の説明として閉塞的状態を考察したが、筆者はそれを心理臨床学的に、精神病理を抱えるクライエントと中年期以降に人生に意味を問うクライエントとに準えて捉えたのだった（廣瀬 2005a）。上田（1999）も自己を「自己から出て自己へ返る」運動と表現した上で、「実存の病」あるいは「自己の病」として「固執」「喪失」「わだかまり」の三病態を捉えたが、それは自己という弁証法的運動の阻害（停滞、空回り、もつれ）であるとしている。

ここで、心理療法システムも当然、上で見てきたようなシステムとしての自己であるわけなので、「心理療法システムは弁証法的運動である」と言えることになる。この定式は、成果報告書第四章（特に第二節と第三節）に直接当たって、そこに至るまでの長い議論を丁寧に追っていただかないと、なかなか了解できないかもしれない。しかしながら、この定式を真に受け容れることができると、本論の一章で「心理療法に共通する地平という位相」と表現したものが、正にこの定式であったのだということが理解できるはずである。即ち、各心理療法の個性的なアプローチの差異に依らず、原

理の面からその本質を見れば、心理療法とは、それ自身の弁証法的運動によって、自己自身を無限に生成し続け、「行為的直観」的に進み行く、無限の差異化運動なのである（廣瀬 2005b）。

四　物語による自己の構成

さて、心理療法が弁証法的運動であるという共通の地平が確認できたので、再び自己という視点に目を戻して、自己というシステムが上手く機能していない場合を考えてみることにする。我々心理臨床家はクライエントがそのような状態に陥っているのを援助しようとするものだが、この援助の本質を原理から見てみようというわけである。

クライエントは自身の閉塞状態を抜け出る為には、他者と関係しなければならない。クライエントは自身で自己と直に関係することはできないのである。それは、自己は「他者と関係することによって、自己と関係する」と、前章で小林が看破している通りである。しかし、これだけでは解りづらいかもしれないので、森岡（2002）の「物語自己（narrative self）」を通して確認しておくことにする。彼は、物語自己を構造の面から見てその特性を論じているが、物語が自己（あるいは意味）を構成するとは如何なることかを論考して、物語ることによる自己の二重化の働きを取り上げている（森岡 2005）。即ち、物語るという行為に伴って発生する、物語られた出来事の主体である「語られた自己」と、物語る主体としての「語る自己」である。人は、自己を語るという行為を通して、語りを聞くということと語りの中にいるということを同時に行っている。語りの中にいながら、語られた自己を捉えるという視点は、同時並立の自己の二重化である。形式論理では難度の高いことを人は普通の事として行っている。森岡は、このような視点を作ることにおいて、語りに介在する他者の視点をいったん経由するという契機が重要であると指摘する。そして、クライエントの語りを「なぞる」という対話場面において考察している。セラピストはクライエントの言葉を通じて感じられたことをなぞるが、クライエントより先には行かない。セラピストの映し返す言葉は、クライエントの感じていること、言いたいこととは似てい

ながらも、様々なズレが生じている。クライエントは、セラピストの応答をくぐることで時間経過を経て、自分の言葉を繰り返し感じ取ることになる。セラピストの応答によって、クライエントは自分の語った場所から、セラピストのなぞる場所へと身をうつすという運動が生じる。セラピストの応答によって、クライエントの言葉は新たな形に移し換えられて提示される。応答という行為を通じて、クライエントの世界は再構成されていく。森岡は、対話に微細な「うつし」の運動が生じていることを見逃さなかった。

このように、うつしの微細運動において、他者のなぞりを通じて時間と場所がずれを含みながら重なり合う。これによって語り手はもう一つの視点を獲得することができるのである。彼は更に、対話の主導性（ドミナンス）の観点にまで考察を深め、対話の相手に主導性を委ね、また委ね返されるという、「力動的な反復からその人の動きのある自己の部分が形となってよみがえる」ことを洞見している。[6] クライエントは、自己を物語るという行為によって、語る自己と語られる自己とが二重化し、対話の一端を引き受けるセラピストに語った言葉をなぞってもらうことで時間と場所が二重化し、それを通して自己を再構成する。このような再構成を通して、対話の主導性の委ねては委ね返されるという「うつし」の微細運動によって、クライエントが「今ここでこの私」につながり、「自分がはっきりする」という持続する感覚が生まれてくる、と考えられる。今このようにまとめられたことを、これまで見てきた自己というシステムあるいは心理療法システムと関連して考えてみたい。

まず、自己というシステムとの関連を見てみよう。自己とは、前章で見たように、二つの相異なる論理から成る自己の間の弁証法的運動であった。論理の異なる二つの自己の関係は、術語は異なるが、森岡が「語る自己」と「語られた自己」として捉えている事態と類同である。ナラティヴによって自己が二重化する、という表現からは感じ取るのが難しいかもしれないが、自己は元来相異なる二つの自己が弁証法的運動していることによって成立するのである。この弁証法的運動は普段健康に生きていられる時には、取り立てて意識されるようなことがないだけである。対話をする時に、

とりわけ自分のことを意識するような状況において、改めてそれとして意識されるようになるのである。だから、物語ることによる自己の二重化とは、より仔細に表現すれば、自己の事を物語るという状況において、それまで特に意識していなかった自己に目を向ける事になって、自己の弁証法的運動が意識に上ってきた結果、「語る自己」である「ノエシス的自己」と「語られた自己」である「ノエマ的自己」との両面が改めて意識されるようになったことを意味するのである。[7]

次に、心理療法システムとの関連を見てみる。対話場面でクライエントの語りをセラピストがなぞることで、クライエントの時間と場所が二重化すると見ておいたが、この時間と場所の二重化のうち、時間の方を先に確認しておこう。森岡（2005）は、クライエントの「今」とカウンセラーが語り返した「今」は時間のズレを含むが、そのズレを通じて、「今」が持続する感覚が出てくる、と指摘している。クライエントが感じていることを言葉に載せて表現すること自体、既に時間のズレを伴っているが、語った言葉はセラピストに映し返されて、微妙なズレを伴いながら、或る一定の時間を経過した後に自分が語った言葉として聴かされることになる。ここには決定的な時間経過が生じている。この明らかな時間のズレが時間の二重化であると考えられるが、この時間のズレは心理療法システム内で起こっている。クライエントやセラピストを実体化し易い目には、この時間のズレは、クライエントが発した言葉をセラピストが映し返したことによって発生したものだとして、二者間のズレと捉えて外在化しやすい。時間が外部にあるものとして、その外部の二者間に発生した時間経過だと考えてしまうのである。しかしながら、クライエントというシステムとセラピストというシステムの一階層上の上位システムとしての心理療法システムを考えることができると、時間の二重化はこの心理療法システム内で発生するものと理解することができるのである。このことをもう少し丁寧に考えてみる。

三章で見たように、自己というシステムは「自己の作用が自己自身へと回帰してくる再帰的循環過程」と捉えられるのであるから、必然的にそこに時間が発生すると考えられる。自己組織系で見たように、システムは環境との相互作用

から新たな自己を形成する。小林（2007）の言う「相成」である。システムが行う作動は自己と環境とを区別しつつ自己を決定するが、その作動は次の自己を決定していく。そして、自己言及的な再帰的循環過程によって、自己自身の作動が巡り巡って自身に還ってくる。この時、還ってきた自己は以前の自己より一歩前進している。この前後の自己同士のズレが時間感覚の源泉であると考えられる。このようなズレは、システムが生きたシステムである限り、必然的に生じるはずである。逆に言えば、時間感覚はこのようにして生まれてくる以外には存在しないと言える。我々が日常感覚として暗黙に前提しているような、万人に共通の時間が外部に客観的に存在すると考えるのは誤謬である。これについては、科学と哲学の領域で長い間議論されてきたことであり、現在も議論され続けていることである。[8] さて、クライエントでもセラピストでも、自己というシステムにおいては、その時間感覚を普段の何気ない体験の中で経験することができるはずである。それは例えば、言葉を発話する行為と、その言葉を内耳あるいは外耳を通して聴くという行為、および聴き取った言葉の意味から次に発話する言葉を考えるという行為において、かすかな時間のズレとして看取されるであろう。あるいは、本に書かれた文字を読むという行為と、読み取った文字から意味を生成する行為、さらに、その意味から自分の思考を巡らすという行為との間には、意識できるか否かに関わらず、時間のズレが生じているはずである。このように、一人のシステムとして考えるならば、時間のズレは実感としても理解しやすい。そこで、クライエントとセラピストとの間で対話されていることによって生じる時間のズレを理解しようとすると、どうしても右で考えたような一人のシステムの延長で考えてしまいたくなる。ところが、クライエントの発話はいったんセラピストをくぐるのだから、このような例では不適である。クライエントから考えれば、セラピストは自分とは別のシステムであるのだから、自分の外部に存在する他者のシステムを前提としなければならない。クライエントから見て、自身の行為によって自らの内にズレが生じている、という意味における時間のズレではない。セラピストからのなぞりという映し返しによって生じてくる時間の二重化は、他者からの働きかけを受けて、その影響を自身の生成過程に取り込むことにおいて生じて

くるのである。微妙な違いにも思えるが、決定的な差異がそこには存在する。この差異を表現する為には、どうしてもクライエントやセラピストのシステムの一階層上のシステムというものを想定しなければ困難である。このように心理療法システムが要請される訳だが、今度は心理療法システムから見ると今まで問題にしてきたことがどのように解消されるのかを見ていきたい。

クライエントのシステムとセラピストのシステムを内に含んだ入れ子構造をした一階層上の心理療法システムは、もしそれを一つ上の階層の視点から見たなら、自己というシステムと同様のシステムである。クライエントあるいはセラピストいずれかのナラティヴが次のナラティヴを生み、それが繰り返されることによって、筋をもった物語を形成しつつ、ナラティヴが次のナラティヴを生むという作動が継起していく。このシステムを外部の客観的視点から見れば、継続していくナラティヴがクライエントによるものかセラピストによるものかは問題にならない。肝心なことは、中断や沈黙が入っても構わないが、ナラティヴが消滅しないで継続されることである。ところが、心理療法システムの内部に入れば、そのナラティヴがクライエントとセラピストとの間で発話を交代しながら行われているのを見ることができる。このように相互に交代しながら作動が繰り返される機序を、筆者は成果報告書第三章第三節の中で、即興劇モデルの「交互誘導合致」（清水 2002）として説明した。これに自己言及過程が組み合わさると、創出サイクルが生じて、無限に繰り返される弁証法的運動となるのであった。この「鍵と鍵穴」（清水 1996）に例えられる交互誘導合致を、論理の異なる二つの側面の自己ではなく、心理療法システムの中の互いに異なる二つのシステム間で働く相互作用として見れば、次のようになろう。即ち、クライエントが思うままにセラピストに向かって語る（振る舞う）と、セラピストはそのクライエントのナラティヴを受けてセラピストなりの表現を返す。その表現は、クライエントにとっては次にどのように語るかの前提条件（拘束条件）となり、その制約の下に新たに振舞うことでクライエントは次のナラティヴを行う。最初に行ったナラティヴと次に行ったナラティヴとの間に、ハッキリ見て取れるように時間の経過が存在する。これが時間の二重

化であり、なぞるという対話場面でなくとも、クライエントとセラピストとが相互に交代してナラティヴが進められれば、生じてくるのである。

ようやく時間の二重化が理解できたので、次に場所の二重化を見ていくことにする。森岡（2005）は、「うつし」の微細運動において、「セラピストの応答によってクライエントは自分の語った場所から、セラピストのなぞる場所へと身をうつすという運動が生じている」と指摘した。クライエントが言葉にして伝えようとした自らの感じは、セラピストに映し返された微妙に異なる表現を受け取ってみると、微妙ではあるが確かに違うズレを伴って改めて感じ直させられるのである。クライエントがセラピストの伝えてくる言葉を受け取って、その表現に表されている感覚を、先に伝えようと言葉にした元の感じと比較する。この時、自らの感じからいったん離れて、セラピストの表現した感覚を想定しているのだが、この自分の感覚の一時的な猶予とセラピストの示すものを想定してみるという行為が、「うつす」において生じる場所の二重化である、と考えられる。

そうすると、時間の二重化で見ておいた交互誘導合致が、この場合においても当てはまる。クライエントとセラピストが交代をするということは、会話の主導性がうつされることを意味している。会話の主導性が交代するということは、自分がそれまで握っていた主導性をいったん手放し、しばらくの間、主導性を相手に委ねて、それがまた戻されるまでの留保をするというだけに止まらず、対話相手の主導性の下でその人固有の主観的世界に浸されることをも意味する。自分の内的世界を相手に映し出そうとしていたのに、今度は相手の内的世界を移されてくるという立場に逆転するわけである。言わば、映そうとする自分は主導性交代によって映される自分に転じ、次の交代によってまた逆に転ずる、と見ることができる。一見正反対の働きが交代を通して矛盾することなく同じ自己において成立している。このような弁証法的関係は自己において本質的な特質である。このようであるから、先に「なぞる」という行為の面から見ておいた、場所の二重化の事態と一致していることが理解できるはずである。

以上で、物語ることによる自己の二重化、うつしの微細運動、なぞりによる時間と場所の二重化を通して、森岡が論じた自己の構成を導き糸にした心理療法システムの説明を取り敢えず終えることにする。

五　心理療法システムから見たクライエントの変化

さて、自己の構成に関しては以上の論考で理解できたが、クライエントが変化（変容）するということはどのように考えたらよいのだろうか？　心理療法における治療機序は、クライエントの自己の構成（再構成）がクライエントとセラピストとの間でなされることで事足りている、と言えるのであるから、それ以上の説明は蛇足なのかもしれない。しかしながら、筆者の問題関心は長らく、心理療法においては何が起こっているのか、ということであったし、心理療法システムという概念を持ち込んだのもその問題意識に応えようとしてきたからに他ならない（廣瀬 2007）。そこで、もう一歩踏み込んだ形で、先ほどの疑問に心理療法システムから答えてみたい。

心理療法システムから見ると、クライエントとセラピストとが交代しながら紡ぎ出していく物語が継続して産出されている限り、少なくともクライエントの自己が構成されているということは明らかである。セラピストの自己に関しても同様に言えるのであるが、今はそれを問わない。クライエントの自己が構成されているということは、決して静態的なことではなく、実際は瞬間々々獲得され続けているという動態的な事態である、ということが言外に含まれている。このような「非連続の連続」（西田 1932）という生成の観点を取れるならば、クライエントが変化していくということは当然の成り行きとして捉えられる。したがって、取り立てて変化（変容）を問題にしなくてもよいのかもしれない。しかし、それでも、断続の中にあって、大きな飛躍と通常の飛躍とは区別されなければならないだろう。そこで、以下においては大きな飛躍という意味における変化（変容）を論じていく。

クライエントは、来談するまでに自分で何とか解決しようとして努力してきたにも拘らず、手の施しようがないとこ

ろまで追い込まれた状態であることが普通である。言わば切羽詰っており、「際にある」（森岡 2005）。このようなクライエントと対話することを通して、クライエントの自己を構成する時、そこに思いがけない想定以上の不連続面を目の当たりにすることがある。このような変化は一体どうして起こるのだろうか？　森岡（2005）の言うように、己の身に起こった苦境を、追い込まれた際において自己の内的資源を掘り起こし、意味づけるという離れ業をなすことによって、受動相から行為相へ反転する、と理解するのが心理臨床学的である。それ以上の説明は屋上屋を重ねる愚挙にも思えるが、心理療法システムで考えてみたい。

心理療法システムから見ると、断絶の大きな飛躍は「創発」によって初めて可能になると理解できるのである。創発は、吉永（1996）によれば次のようである。「下位のレベルにある個々の構成要素間の局所的相互作用から、上位のレベルにあるなんらかの大域的構造が出現する。この構造によって規定された全体的な特性が今度は下方へフィードバックされ、構成要素のふるまいに影響を及ぼす」。これら上下双方向の見方を統一的に捉えるキーワードが「創発」ということだった。このことからも分かるように、創発はクライエントというシステムに直接生じるのではない。クライエントはセラピストの働きかけなしに独力でその創発を起こしたのではないからである。クライエントがセラピストとの対話を通して、相互作用による新たな自己形成を行う中で、創発が起こったと見るべきである。そうすると、この創発は何処に生じるのだろうか？　筆者は、それを心理療法システムに起こったと考えている。心理療法システムは、クライエントとセラピストとの相互作用を通して、心理療法を開始した状態とは違った内部状態を形成している。その内部状態は、言わば、ある臨界点を迎えることによって、それまでの秩序形成の過程からは想定できないような局所最適解（あるいは大局最適解）という安定状態に一気に移る（相転移）。今までの内部状態とは全く異なる安定状態へと創発が生じたのである。このように、創発はクライエントのシステムの位相で最初に起こるのではなく、論理的に一階型上の位相で起こると考えるべきである。創発が心理療法システムで起こると、心理療法システムと入れ子構造のクライエントのシス

テムは直ちに相互作用を通して、その創発の同内容を自らの内に形成する。

心理療法の場面においてクライエントの変化は、クライエントの言葉を通して事後に報告される形で耳にすることが多い為、クライエントが面接と面接の間に、即ちセラピスト不在の間に変化を生じたと思う人が多いだろう。そこで、セラピストの役割が割り引かれるわけである。技法としてはその方が好ましいかもしれない。しかし、論理的には、クライエントが自分一人の時に勝手に変化を生じたのである、とは考えられない。創発が起こるほどの内部状態は、心理療法のプロセスがかなり進んだ段階であり、その頃にはクライエントは自覚せずとも、自分の内部に「内的なセラピスト」という内的対象を保持していると考えるのが自然である。クライエントはセラピストの不在の時にも自らの内的対象である内的セラピストと対話を続けているはずである。[9] その内的な対話は、クライエントの内部で起こっているのだと素朴に考えがちであるが、働きを考えると、心理療法システムの内部でセラピストと対話をしている状態と変わりがない。心理療法システムは目に見える実体のシステムではないので、カウンセリングルームで実際に行なわれている心理療法だけに限定されない。心理療法の働きを論理的に考えれば、クライエントの内部で行われている心理療法も心理療法システムである。

右の説明が牽強付会のように聞こえる向きには、クライエントが変化するより前にセラピストがその変化の兆しを看取できる場合があることを指摘すれば、反論としては十分だろう。筆者の経験からも、クライエントの大きな変容においては、クライエントの自覚よりずっと以前にセラピストがその前兆に気づいていることが多いと言える。また、セラピストの役割からしても、心理療法の過程で大きな変容の前兆にセラピストの方が先に気づいていないようでは心許ないと言わざるを得ない。実際、創発と見なされるような変化は、瞬間というよりは、或る程度の過程を踏まえた飛躍と考える方が実情に近いと思われ、その過程の途上では、クライエントは自らの身に起こりつつある変化に無自覚であることの方が多い。そして、創発と言えるような変容が起こった後で、それを改めて振り返る形でセラピストに語ること

を通して、自らを納得させるようにして捉え直している、と見えるのである。

さらにまた、クライエントに起こると見える変容は、実はクライエントにのみ生じるのではないことを考えるべきである。クライエントの変容が同様にセラピストにも影響を与えることは、ユング派で理解されている「変容の器」という概念[10]が最も分かり易いかもしれない。また、ユング派だけに限らず、精神分析を基本とする対話精神療法においても、神田橋（1990）が特に境界例を始めとする重症例のクライエントとの治療関係について論じていることからも了解できるであろう。[11]さらに、パーソンセンタード・セラピーにおいても、クライエント中心の為にセラピストの一部を明け渡すことを求められる。セラピストは絶えざる「脱中心化」の動きを余儀なくされ、「非人称性」（森岡 2002）という特異な状態を実現するよう求められるのである。

ここまで説明してきたことから、クライエントの変化（変容）は心理療法システムの創発によるものであることが理解されたものと思われる。このことが真に理解されると、心理療法によってクライエントの変化を引き起こすことを技法として扱うということは原理的に不可能である、ということが納得されるはずである。各学派や諸アプローチのベテランの手になる技法論の書籍に当たっても解ることだが、それらに共通しているのは、クライエントが治癒するという最後の一点において、セラピストのコントロールを離れていることを自らの経験から認めておられる、という点である。筆者は、そこにこそベテランの謙虚さと自負とを感じる。この事実は学派やアプローチの違いを超えている、と言っていいように思う。しかしながら、近年注目を集めてきたアプローチを紹介しているものの中には、この当たり前の事実の重大性をよく分かっていないのではないか、と疑問に思われるような表現をしているものも存在する。例えば、物語を扱うものの関連で言えば、クライエントの持っているドミナント・ストーリー（dominant story）をオルタナティヴ・ストーリー（alternative story）に書き換えるという技法があるが、これに関して森岡（2004）も苦言を呈しているように、技法のそもそもの発想を表層的に単純化して捉え、「語られた素材をいくつかの筋によって並べ替え、代わりの物語

を見出すということが操作的に行われるとしたら危険で」ある。オルタナティヴ・ストーリーに変化するのは、クライエントの変化に伴って結果として生じるのであって、決してその逆ではない。ドミナント・ストーリーがオルタナティヴ・ストーリーに変容していくのは、心理療法システムの創発として起こることなのである。このような踏み越えてはならない重大な境界も、心理療法システムを想定すれば明瞭に区別をつけられる。一見では技法のような実用性がなさそうに思える原理の話であるが、マニュアル的に書かれた解説書よりも明確に本質を伝えられるのである。心理療法基礎論の導入を訴える所以である。

おわりに

本論では、「一般研究」を通して確認された視座の下、筆者が提唱している心理療法基礎論の必要性を具体的なテーマを用いて論考した。それは、物語というテーマについて、複雑系という視座の下、心理療法システムを想定して心理療法を各学派やアプローチの違いに依らず心理臨床実践的に考えていくことであった。物語は心理療法と深い関係にある重要なテーマであり、小論では扱い切れない広がりを持つ。本論では、クライエントが物語ることで自己を構成するという一契機を取り扱った。一つの側面でしかないように思うかもしれないが、この契機は心理療法において極めて本質的な側面である。この側面において心理療法システムを持ち込むことで、改めて明らかになる重要な事実を確認した。

元来、クライエントの語る物語とクライエントの実際の体験との間には、本質的に、埋め難いズレがある。人である以上誰しも経験することであるが、「語られた自己（narrated self）」と「体験しつつある自己（experiencing self）」との間にはどうにもならないズレがあることを感じる。物語ることによって、なまの体験が物語として固定されるのであるが、それは「ピン止めの効果」程度のものである。体験しつつある生き生きとした自己は、このような物語を打ち破り乗り越えていく。だから、物語は自己を構成していく上で作られていかなければならないのだが、作り上げられること

で完成されるわけではない。[12] 生きていくということは、作り上げた物語を一方で砕いていかなければならないことを要請している。森岡（2004）が言うように、「物語作り（story-making）と物語り砕き（story-breaking）の弁証法」が大切である。このことは、自己という弁証法的運動あるいは、心理療法という弁証法的運動と併せて考えると、同質のことを言い表していると解るはずである。

最後に、物語というと展開するものばかりを思い浮かべがちであるが、同じモティーフの繰り返しや反復ということがある。これについては、河合（1998）が概念を心理療法する中で取り上げている。この内容に関しても考察を深めたかったのだが、紙幅の関係で取り上げられなかった。稿を改めて取り組んでみたい。

注

1　2005.3～2007.3 に『臨床心理学』Vol. 5 No. 2～Vol. 7 No. 2 の誌上に森岡正芳氏の編集により連載されたもの。2008.1 に『ナラティヴと心理療法』、森岡正芳編集、金剛出版、として単行本化された。

2　熱力学第2法則（「エントロピー増大の法則」）で規定されているように、地球上では例えば高熱を持った物は放っておくと、その物体は周りの空気分子の熱運動エネルギーへとそのエネルギーを移していって、やがてそれ以上変化しない熱平衡状態に落ち着く。このような熱平衡にまだ達していない状態を非平衡状態と呼ぶ。蔵本（2007）は、振り子時計やししおどしのような熱機関を例に挙げて、エネルギー変換過程で生成するエントロピーをエネルギーと共に外部世界へ排出し続けながら、ダイナミックな釣り合いによって安定な状態を保ち、かつ外部世界に開かれている非平衡状態のシステムを「非平衡開放系」と説明している。生物は、シュレディンガーが指摘したように、非平衡開放系の最たる例である。

3　この分かり易い例が相転移である。水は0℃と100℃とを境に固相・液相・気相の三態間を構造相転移する。水の状態間の相転移は第一種相転移と呼ばれる。第二種相転移には、例えば、磁性の相が温度によって常磁性から強磁性あるいは反強磁性へ、あるいは逆に強磁性あるいは反強磁性から常磁性へと転移する磁気相転移が挙げられる。他にも、常伝導から超伝導状態への転移、液体ヘリウムの超流動状態などが挙げられる。

4　自己を巡る、この辺りの考察は、後期の西田哲学の議論と重なっている。

5　「あいだ」あるいは「差異」としての境界を接している二つのものは、見ている局面は異なるが、「ノエマ的自己」と「ノエシス的自己」（木村 1981）でもよいし、「個別的主体」と「集団的主体」（木村 2005）と置き換えても同じ事態を見ていることに変わりはない。

6　ドミナンスに関しては、森岡（2005）も述べているように、Hermans（1993）が行っている、対面場面でのドミナンスの反転の議論が参考になる。

7　「ノエシス的自己／ノエマ的自己」という術語は、木村が一九八〇年代に使用していたものであるが、中期の思索はタイミング論を経て、自己と他者の「あいだ」、偶然性と必然性の境界へと展開していく。木村の後期も含めて全体の思索を眺め渡すには、木村・檜垣（2006）の対話が参考になる。

8　例えば、「あいだ」を巡る自己と時間に関する木村敏の一連の議論や、原生計算・原生理論・原生実験と呼ばれる独自の装置で時間を再考した郡司（1995）の議論を参照されたい。

9　諸富（2005）は、ロジャーズの「治療的人格変化の必要十分条件」を批判的発展的に検討する中で、「クライエントのうちなるセラピスト（主体）」と「クライエントのうちなるクライエント（フェルト・センス）」との対話を重ねていく内的体験のプロセスとして、「クライエント中心」を読み直している。

10　「変容の器」はユング心理学ではよく「ヘルメスの容器」と呼ばれている。横山（2003）が心理療法の枠組みについて、ヘルメスの容器に関連する議論を行っているのが大変参考になる。

11　このような重症例のクライエントとの治療関係は錯綜した「厄介な症例」になり易いが、クライエントの背負ってきた錯綜の世界が治療関係に投入されるようになると、セラピストはクライエントとの間で「二人のズレの擦り合わせとしての対話」を続ける中で、追い詰められるような雰囲気が生じてきて、守勢に回らざるを得ないような自己分裂が内部に生じる、と神田橋は説明する。その実態を「治療者はつぎつぎに自己の一部を関係のなかに切り捨てて後退することを余儀なくされる」ことである、と喝破しているのだが、「治療の流れ」に沿うという方針を捨てずに「逃げて逃げて生き延びる」ような選択が治療者としての正しい選択であると推奨している。この正しい選択を採用することは、セラピスト自身が治療開始前の自分のままではいられないことの証左となっている。

12　筆者も同様の事態を、清水の即興劇モデルの中で相異なる二つの論理の接点となる「場所モデル（場所イメージ）」という概念において論じた（廣瀬 2005a）。正常な交互誘導合致が成立していくためには、いったん作られた場所モデルが精密なものに改良されていく必要があるのだが、それは完成されるものではなく、捨てられることによって更に先に進む働きをする、と指摘した。「物語自己」においては「物語」が即興劇モデル（＝自己）の「場所モデル」に相当すると考えられる。

文献リスト

郡司ペギオ-幸男（2002）：『生成する生命』、哲学書房

Hermans, H. & Kempen, H.（1993）：*The Dialogical Self: Meaning as Movement*. Academic Press.（溝口・水間・森岡訳〈2006〉『対話的自己』、新曜社）

廣瀬幸市（2003）：「場の理論と心理療法」『哲学論集』第五〇号、四〇―五四頁

廣瀬幸市（2005a）：「場の理論による心理療法モデルの射程」『大谷学報』第八四巻第二号、一―二三頁

廣瀬幸市（2005b）：『意識・存在フィールドについての心理臨床学的考察――イメージによらない心理療法理解――』、京都大学大学院　課程博士取得論文

廣瀬幸市（2007）：『複雑系から見た心理療法理解――心理療法基礎論に向けて――』、大谷大学真宗総合研究所、大谷大学真宗総合研究所二〇〇六年度一般研究（個人研究）研究成果報告書

井庭崇・福原義久（1998）：『複雑系入門』、ＮＴＴ出版

井筒俊彦（1989）：『コスモスとアンチコスモス』、岩波書店

神田橋條治（1990）：『精神療法面接のコツ』、岩崎学術出版社

Kauffman, S.（1995）：*At home in the universe: the search for laws of self-organization and complexity*. Oxford University Press.（米沢富美子監訳〈1999〉『自己組織化と進化の論理　宇宙を貫く複雑系の法則』、日本経済新聞社）

河合俊雄（1998）：『概念の心理臨床』、日本評論社

河合俊雄（2000）：『心理臨床の基礎２　心理臨床の理論』、岩波書店

河本英夫（2000）：『オートポイエーシス 2001』、新曜社

河本英夫（2006）：『システム現象学　オートポイエーシスの第四領域』、新曜社
木村　敏（1981）：『自己・あいだ・時間』、弘文堂
木村　敏（2005）：『関係としての自己』、みすず書房
木村敏・檜垣立哉（2006）：『生命と現実　木村敏との対話』、河出書房新社
小林道憲（2007）：『複雑系の哲学――21世紀の科学への哲学入門』、麗澤大学出版会
倉光　修（2007）：「カウンセリングの一般的プロセス」（倉光・桑原編集『カウンセリング・ガイドブック』、岩波書店、三一―六七頁）
蔵本由紀（2007）：『非線形科学』、集英社
桑原知子（2007）：「カウンセリング・プロセスで何が起こっているのか」（倉光・桑原編集『カウンセリング・ガイドブック』、岩波書店、六七―七二頁）
森岡正芳（2002）：『物語としての面接　ミメーシスと自己の変容』、新曜社
森岡正芳（2004）：「物語的アプローチ」（亀口憲治編『心理臨床学全書10　臨床心理面接技法3』、誠信書房、二〇〇―二三〇頁）
森岡正芳（2005）：『うつし　臨床の詩学』、みすず書房
諸富祥彦（2005）：「人格成長論―ロジャーズの臨床心理面接論の批判的発展的検討を中心に」（東山紘久編『心理臨床学全書3　心理臨床面接学』、誠信書房、一〇一―一六二頁）
西田幾多郎（1932）：「無の自覺的限定」（『西田幾多郎全集第6巻』〈1965〉に所収）
佐藤達哉（2002）：『日本における心理学の受容と展開』、北大路書房
清水　博（1996）：『生命知としての場の論理』、中央公論社
清水　博（1999）：『生命と場所（新版）』、ＮＴＴ出版
清水　博（2000）：「共創と場所」（清水博編『場と共創』、ＮＴＴ出版、二三―一七七頁）
清水　博（2002）：「内的純粋経験からのドラマの創出」（日本哲学史フォーラム編『日本の哲学』第三号、昭和堂、七一―九一頁）
清水　博（2003）：『場の思想』、東京大学出版会
都甲潔・江崎秀・林健司（1999）：『自己組織化とは何か』、講談社

上田閑照（1999）：『実存と虚存―二重世界内存在』、筑摩書房
横山　博（2003）：「心理療法と枠」（横山博編『心理療法』、新曜社、二九五―三三五頁）
吉永良正（1997）：『「複雑系」とは何か』、講談社